

二十一世紀的世界と多言語・多文化主義 —周辺からの遠近法— 再論

1999年7月9日（金）・末川記念会館ホール

提言：

西川長夫（立命館大学）「問題をいかに深めるか—多文化主義とアイデンティティの問題を中心に—」

岡 真理（大阪女子大学）「サバルタンに語りかける」

姜 尚中（東京大学）「グローバル化とナショナリティの変容」

西 成彦（立命館大学）「文学は語りを横領する—森鷗外と中野重治（シルバーバーク『チェンジングソング』とトリン T. ミンハの著作を受けて）」

渡辺公三（立命館大学）「国民国家から言語と文化を引き算する」

コメント：

細見和之（大阪府立大学），崎山政毅（神戸市外国語大学）

1998年11月、10周年記念の国際シンポジウム『二十一世紀的世界と多言語・多文化主義—周辺からの遠近法—』が、3日間この会場で行われました。今日はその再論として、再び大阪女子大学から岡真理さん、東京大学から姜尚中（カン・サンジュン）さんをお招きいたしまして、公開シンポジウムを開きたいと思います。

先の国際シンポジウムでは、3日間大変長く、激しい議論、あるいは興味深い問題提起等がありました。しかし、残念ながら3日間の総括を行う時間がなかったということで、今日のを設けたわけです。

岡さんと姜さんは『思想』の1999年3月号には、

—今日報告していただく西さんも、巻頭論文を書かれていますけれども—対談されています。このお二人が来ていただいて、昨年3日間行われたシンポジウムをより深い、そして又いい成果を上げるような形で、今回のシンポジウムが成功することを祈りたいと思います。

進行といたしましては、まず本研究所長の西川長夫に「問題をいかに深めるか」という形で、問題提起させていただきまして、その後、岡真理さん、姜尚中さんに報告していただきます。休憩の後、本学の西と渡辺に引き続いて報告していただきまして、その後、全体討論という形で行いたいと思います。

<司会：高橋秀寿（文学部）>